

第89回麻布獣医学会 一般演題6

犬の大動脈血栓塞栓症におけるモンテプラゼ使用報告

蔵本 惇嗣, 杉浦 洋明, 永滝 春菜, 山口 恭寛, 宮本 修治

DVMs どうぶつ医療センター横浜

<はじめに>

組織プラスミノゲン活性化因子 (t-PA) は線溶系に関与するセリンプロテアーゼの一種であり、プラスミノゲンを活性化させることでフィブリンを分解し、血栓を溶解させる作用を持つ。組換え型 t-PA 製剤の一つモンテプラゼはヒトの冠動脈血栓・急性肺塞栓症の治療に使われ、近年では猫の大動脈血栓塞栓症 (ATE) においても積極的に用いられている。

一方、犬の ATE は比較的まれな疾患であり、基礎疾患もバリエーションに富んでいることや早期に死亡してしまうことが多いこともあり、t-PA 製剤の使用を含めて治療法が確立されているとは言い難い。

今回、ATE と診断した犬の症例について、モンテプラゼを用いた群と用いなかった群とで予後に何らかの差異が出ているのか、回顧的に研究を行った。

<材料及び方法>

2012年10月から2014年8月にDVMs どうぶつ医療センター横浜を救急で受診し、身体検査・血液検査・画像検査にてATEと診断した17頭の犬(内1頭は3回に渡りATEを発症し、治療を実施)を対象とした。17頭の年齢は7歳から17歳、明らかな性差・品種差は認めなかった。疑われた基礎疾患は心疾患4例、腫瘍性疾患4例、蛋白漏出性疾患2例、クッシング症候群1例、急性肝障害に続発したDIC1例、不明

5例であった。なお、3症例についてはATEに伴う激痛のため早期に安楽死処置となっている。

11頭の犬にのべ13回のモンテプラゼ投与を行ったが、その全てで27500 IU/kgをおよそ2分間かけて緩徐に静脈内投与。モンテプラゼ投与群と非投与群について、フィッシャーの正確確率検定及びt検定を用いて予後の有意差を判定した。また、発症から治療開始までの時間と予後とについても検定を行った。

<結果>

モンテプラゼ投与群では非投与群に比べて症状が緩和する傾向はみられるものの、生存期間とともに統計的有意差は認められなかった。また、治療開始までの時間が短い症例程回復しやすい傾向がみられたが、統計的には有意差は認められなかった。

<考察>

今回の研究では犬のATEに対するモンテプラゼ投与に統計的に優位さは認めなかったが、発症早期の投与で症状は緩和傾向を示した。しかし、まだまだ症例数が少なく、更なる蓄積が必要と考えられた。また、ATEを誘発する基礎疾患に対する治療もまた予後を左右する因子となり得ると考えられ、治療の組み合わせによってはより予後を改善できる余地があると思われる。